



チエルノヴィッツのラビ

赤尾 光春

(あかおみつはる)

北海道大学スラブ研究センター非常勤研究員

ヘブライ語の祝福

二〇〇一年の夏、イスラエルのイディッシュ文化公社が主催する、ウクライナの旧ユダヤ人史跡めぐりに同行した。目的地のひとつにルーマニア国境付近の町チエルノヴィッツ(現チエルノウイツ)があった。オスマントルク帝国、オーストリア・ハンガリー帝国、ルーマニア、そしてソ連の支配下にあつた典型的な多言語・多文化都市である。独ソ戦前夜には町の人口の半数近くをユダヤ人が占めていたが、最近の統計では、町全体の人口約二万六〇〇〇人のうちユダヤ人はわずかに一三〇〇人(〇・六パーセント)を残すのみである。

われわれは、この町にただひとつ残る古色蒼然としたユダヤ教会堂を訪れた。ちようと安息日で、祈祷に必要な男性一〇人をどうにかこうにかき集めたといった様子だった。黒装束の立派なラビ(律法学者)が厳かに祈祷をとり仕切っていた。ところが一行のイスラエル人たちはといえば、祈る人びとには目もくれず、聖書のモチーフが描かれた天井画に感嘆の声を上げるなり、思い思いにシャツタ(布)を切り始めた。たまりかねたラビは祈祷を中断し、「あなたがたの国ではそういうことが許されるかもしれないが、わたしたちは今、安息日の祈りの最中なのですこしたしなめた。

建物から出ると、色とりどりのスカーフを被った女性が数人、正門のそばのベンチに所在なげに腰掛けているのが目にとまった。聞けば、彼女らはユダヤ人ではないが、祈祷が終わるのをただひたすら待っていると言う。その光景をどうしてか忘れることができず、翌朝、わたしは一

人で教会堂を訪れることに決めた。

女性たちはやはり同じ場所において、人数も一〇人ほどに増えていた。扉から一人また一人と、スカーフ姿の女性たちがあらわれては去って行く。わたしは女性たちを呼びとめて、話を聞いてみた。それで行かされたことには、彼女らはみな地元でキリスト教徒で、毎朝のように熱心にラビのもとを訪れ、お布施をする見返りに、ヘブライ語の祝福を受けていると言う。無病息災や家内安全などがおまな願ひ事だが、なかには合格祈願に来る学生までいるそうだった。キリスト教徒がなぜユダヤ人のところへ来るのか、神父の祝福は十分ではないのかなどと問うても「神さまはただ一人。キリスト教もユダヤ教も区別はない」と一向にとり合わない。そうかと思えば、「キリスト教徒よりもユダヤ人の方が熱心にお祈りするから、効き目はずっと大きい」と自信たっぷりに答える者もいた。

キリスト教徒のユダヤ人信仰

かつてウクライナでは農村部を中心に、レベとよばれるハシディズム(一八世紀半ば、東欧で誕生したユダヤ教虔敬主義運動の精神的導師たちが、ユダヤ人のみならずキリスト教徒からの信仰も集めていたことが知られている。ユダヤ人といえは、中世から近世にかけてのキリスト教世界では、邪悪で不浄な存在として一方的に差別され、迫害されてきたものと理解されているが、ごく稀に、福をもたらす存在として重宝されていたという意外な側面も確認されている。とはいえ、ユダヤ人がめつきり少なくなった二世紀初頭のウクライナで、まったく同じ現象を

この目で確かめようとは夢にも思っていなかった。

エルサレムに戻って、チエルノヴィッツ出身の教授にこの話をしたところ、教授は微笑を浮かべてこうつけ加えた。ソ連時代に無神論者の技師がいた。ユダヤ教の知識はともちも合わせていなかったが、ベレストロイカで一念発起し、イスラエルでユダヤ教のいろはをにわか仕込み、黒装束に身を包んで生まれ故郷に帰ってきた。

町でたった一人のラビはこうして誕生したというわけである。

ユダヤ教会堂の正門付近で祈祷の終わりを待つキリスト教徒たち

